
異世界の双刀

晴ノ叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の双刀

【Nコード】

N1117T

【作者名】

晴ノ叢雲

【あらすじ】

普通に暮らしていた普通じゃない高校生、貫風 博人かんなぎひろとは突然謎の光によって異世界へと飛ばされてしまった。目が覚めると見知らぬ場所。いったい何をどうしたらいい？それさえもわからず博人の異世界での生活が始まる。

とりあえず主人公は最強です。

第一話・はじまり・（前書き）

晴ノ叢雲です。初小説です。

とりあえずやりたいことを自由に書いてます。

なにとぞ、よろしくです。

第一話・はじまり

・・・はじまり・・・

子供の頃から、剣術を教え込まれた。
その刃の使い方を教わった。
ただ、強くなれと言われた。

その頃はよくわからなかった。
だからただ、ひたすらに強くなった。
だが、今になって思うようになった。

何のための、強さなのか・・・

その強さに、何の意味があるのだろうか。

とある学校の授業中。

そこで一人の少年、貫風^{かたなほこり}博人^{ひろと}は爆睡していた…授業中なのに。

「それじゃこの問題をつておい貫風！ 貫風！」

前にいる教師、名前が……あいつ誰だ？ が爆睡している博人をみつけた。

「……なんすか？」

「なんすかじゃないだろうが、今は授業中だぞ。ずいぶん余裕があるみたいだな。」

この問題解いてみる。さあ、解いてみるお！」

無駄に熱い誰かが博人に回答を迫った。

その回答に博人は、

「わかりません」

即答だった。

「わかりませんで、おまえなあ。わからんのだっいたら寝てる場合じゃないだろう。」

ちゃんと話を聞いとけよ」

「ういっす。わかりました佐藤先生」

「誰が佐藤だ！ おれは加藤だ！」

「加藤先生っすか。おれは貫風 博人です」

「いや、知ってるから…もついいよ、ちゃんと話聞いとけよ」

「ういっす」

そのまま博人はまた眠りについていた。

教師の加藤……だったよな。はハア、と溜息を吐くと前に向き直り、授業を始めた。

もう何を言ってもダメだと思ったのだろう。

次に博人が目を覚ましたのは、放課後になってからだだった。

「うえっ、もう放課後じゃん、寝すぎたなあ」

博人は急いで帰路についた。

そのときはまだ。博人は気がついていなかった。

いや、気づくことはできなかった。

まさか自分が、この世界から消えてしまうなどとは

……

その日の夜、博人は自宅にある道場の中心で正座をして目を瞑り、瞑想していた。

その両腰には自身の身長を越す大きな刀、斬馬刀が二本差しており、正面には大きな丸太が一本鎮座していた。動くものは何もなく、時が止まっているかのような空間となっていた。

8

しばらく座っていた博人はゆっくりと目を開き、立ち上がると斬馬刀を両手にとり、大きく深呼吸をした。そして前に大きく踏み込むと

ヒュオンツツツ!!!

という風を切る音と共に両手の斬馬刀を交差する様に斜め上に大きく振り切った。

…しかし、何も起こらない。

博人はその場でゆっくりと振り返り、刀を左右に振り払った後、鞘に納め始めた。

そして、キンツという音と共に丸太は三つに分かれ、崩れ落ちた。

「また、つま」

言わせない。言わせるわけがない。当然である。

「今日の鍛練終了」…はあ、意味あんのかなあこれ。とか言いながら続けてるんだけど」

と言いながら溜息を吐きつつ、博人は三つになった丸太を拾い始めた。

鍛練と言えるのか不明だが、博人にとっては鍛練なのだろう。うんそうだろう。

博人は道場から庭に出ると、手に持っていた元丸太をかつての鍛練（仮）の犠牲となった丸太たちの上に積み重ねた。

「うおおっ、疲れたあ。さて、シャワー浴びて寝るかな・・・ん？」

博人は大きく伸びをすると、空に移動しながら光る何かを見つけた。

「お、流れ星か。いいねえ。」

ふと、その光を流れ星だと思っていた博人はあることに気付いた。

「あれ、結構でかくね？」

博人は、流れ星が大きいと思ったのだろう。しかし、実際はそうではなかった。

「……てかこっちに来てんじゃん！」

そう、その光は博人の方へと近づいていたのだった。

「いやいや、なんだよあれ!? あれ来ちゃだめなもんだろ! どっか行きなさいよ!」

もはや何を言っているのかよくわからないが、その光は博人に向かって高速で迫っていた。

そして

「いやいや待て待て待て ツ!!!」

避けることはできずに光は博人に直撃し、光が爆発したかのように大きく輝いた。

そして

光の爆発が収まると、そこにはだれもいなかった。

第一話・はじまり・（後書き）

小説書くのって難しいですね…

ダメなところも多いですが、良ければ読んでみてください。

第二話・見知らぬ場所・（前書き）

いや〜難しいですね〜

思うようにいかないものですね。

でも頑張っていけます。

第二話・見知らぬ場所・

- 見知らぬ場所 -

木々が生い茂る広大な森で、突然光が大きく輝き、激しい風が吹き荒れた。

その輝きと強風に驚いた森の動物たちが何事かと一斉に逃げ出した。

しばらく輝いていた光が収まると、光の輝きがあった中心に一人の人間が仰向けで倒れていた。

ご察しの通り、貫風 博人である。

「ん……あれ……？」

しばらく倒れていた博人は、頬に感じる風で目を覚まし、飛び起きた。が

「はっ！！　そうだ、ここブアッ！！」

勢いよく起きてしまったため、目の前にあった木の枝に気が付かず、顔をもろに強打してしまった。

そのため、またも仰向けで地に倒れることになってしまった。

「ぐおおおウツ！、顔が！そして鼻がああ！」

痛む部分の説明ができるほどなので大丈夫なようだ。

「いてて、誰だよこんなとこに木の枝なんてつけたのは」

もちろん自然の力であり、誰のせいでもない。

博人は木の枝を避けて起き上がり、周りを見渡してみた。
そしてそこにあったのは

「木、しかないなあ。そりゃそうか。見た感じ森の中だもんな。ははは〜」

木、そして木である。前を後ろを右を左を見ても、木しかなかった。

「え？なんで木があるんだよ。俺居たの道場だろ？」

博人はいまさらながら、周りの変化に疑問を抱いた。

博人がいたのは自宅にある道場であり、ジャングルのような森の中ではなかったはずだ。

流れ星に直撃した後意識を失い、気が付くと見知らぬ森の中。疑問に思うなと言うほうが無理なことである。

「何がどうなってんだよ…とりあえず移動してみるか。」

この木に囲まれた森の中では埒があかない。

少しでも情報がほしい博人は移動することにした。

が、博人は自身の周囲にふと違和感を感じた。

何かいる。

その違和感はまだ距離があるが徐々に博人に近づいていた。近づくとつれ、その違和感が発しているものに気付いた。

殺気である。

博人は咄嗟に腰にある刀の一本に手を添え、身構えた。

「なんだ…何が来る……」

そして、それは それらは 目の前に飛び出してきた。

「なんだよ…こいつら…」

目の前に現れたそれらは、頭に鋭い刃物のようなものがあり、白色の体に黒色の線上の模様がある狼のような獣。

その獣が目の前に五頭。

やつらは、捕食しようとして徐々に近づいてきていた。

「お前ら…やるうつてのか…?」

博人は低い声で威圧するように囁いた。

両者ともしばらく様子を見ていたが、痺れを切らした獣三頭が口を大きく開き、牙をむき出しながら一斉に飛び掛かってきた。

それと同時に博人は手に持つ刀を振り切り、

目の前に一陣の風が吹いた

直後、周囲の木々が大きく切り裂かれ、吹き飛んだ。

「一刀流 風切」

居合切りである。

博人の刀、大太刀である斬馬刀は鞘の上半分に溝があるため、刃が鞘に引つかかることなく振り切ることができるようになっていた。さらに刀身が長いためリーチはとても大きいのだ。

飛び掛かっていた三頭の獣は胴体から半分になり、大きく吹き飛ばされると二度と動くことはなかった。

「さて、お前らもかかってくるか？」

博人は言葉の中に殺気を込め、獣たちに向き直った。すると残りの獣たちは本能的に敵わないと感じたのか、一斉に逃げ出した。

「チツ、逃げるくらいなら来るんじゃないよ」

見えなくなるのを確認した後、刀を鞘に直し、呟いた。

*
*
*
*
*

*
*
*
*
*

「なんだ……これ……？」

獣たちとの戦闘のあと、しばらく森の中を移動していた博人はある

ものを見つけた。

それは、人の大きさを優に三倍は超すであろう大きな人型の機械人形だった。

機械人形は木に背を預け横たわり朽ち果てていた。

所々に苔が生えているので果ててから相当な時間が経っていたのだろう。

目に光は無く、胴体にあたる部分には大きな亀裂が入っており、その隙間から中の機械が覗いていた。

その様子は木に囲まれた森の中では異様な光景だった。

なんでこんなものがこんな所にあるんだよ…

その囁きとも取れる言葉に返すものはいなかった。

第二話・見知らぬ場所・（後書き）

なかなか先に進みません…

ちなみに主人公の技・風切・読み方はカザキリです。

第三話・進むその先に・（前書き）

書いてるうちに終わりが見えなかった・・・
途中で切るところが見当たらなかった・・・
結果長くなってしまいました。がとりあえず投稿します。

第三話・進むその先に・

・進むその先に・

「おお！　これはもしかして！」

果てた機械人形に摘んできた花を添え、静かに別れを告げてその場を後にした博人は森の中に開けた所を見つけた。

木々が左右に大きく離れ、むき出しの地面がどこまでも続いている空間。

道だった。

そして道の真ん中あたりに平行に引かれどこまでも続いている二本の線。

その線の間にある複数の蹄の後、おそらく馬車が通ったのだろう。

馬車があるということはその先には誰かがいる。

つまりこの跡を辿って行けば…

「誰かに会えるかもな」

やっと手がかりを見つけた博人の行動は速かった。

さっそくその跡を辿って行くことにした。

そしてたどって行くこと約四時間

「や、やっと着いた…遠かった…」

方向はあっているのか。もしかしたら逆だったんじゃないのか。実は道ではなかったのではないのか。などいろいろな不安を振り切り、博人はついに人がいる街に着くことができた。

人が造りだした国、ディスリア

街の入り口には橋が架かっており、その奥に大きな門があり、両端には槍を持った見るからに門番が二人いた。

その街は遠くから見てもわかる程とても大きく、賑やかな街だった。

では早速入ってみようか。と橋を渡ろうとすると

「その者、止まれ」

「えくと、なにか？」

うん、やっぱり止められた。

そりゃそうか。見ない顔の人間がいきなり腰に大きな刀を二本も下げていたら警戒されてあたりまえか。

そう思っていた博人は、左にいる門番の…門番Aでいいか。いいよな。が発した予想とは違う言葉に絶句した。

「青年、もしかや光に包まれてここに来たのではないか？」

「ッ！！ どうしてそれを……」

なぜ、どうしてそのことを知っている？

門番Aの核心をついた質問に博人は驚きを隠せなかった。

「やはりそうか。ならば王宮まで来てもらおうか。」

門番Aが片手を軽くあげると奥からさらに門番C、Hの六人現れ、博人の周りを取り囲んだ。

ちなみに門番Bは橋の右側にいた人である。

わけがわからないまま取り囲まれた博人は門番Aに向かって叫んだ。

「おいおいいきなりなんだよ……どういふことが説明しろよ門番A！」

「誰が門番Aだ！俺はシャウロだ！……はあ、国王の命令だ。光によつてやってきた者が来れば連れてくるように言われているんだ。」

「なんだよそれ、その国王は何か知ってるのか？」

「さあな、俺はそれ以上は知らん。ただ連れてくるように命じられただけだ。後は王宮に行けばわかるだろう。」

「……わかった。」

博人は渋々納得し、王宮まで行くことになった。

王宮の奥にある広い部屋、王の間。そこに博人は連れてこられた。博人の目の前には国王が、手前には髭の生えた爺さんが、周りには貴族や大臣などお偉い様方がいた。無駄に豪華な服着やがって…

28

「よく来た青年。私がこの国の王フラグリット・デイスリアである。」

「はあ、どうも。貫風博人です。」

国の王などと言われてもどうすればいいのかわからない博人はとりあえず自己紹介をしておいた。

「突然に強引な呼び出し、申し訳ない。実はおぬしにやってもらいたいことがあるんじゃない」

とりあえずな自己紹介を終え、一呼吸間を開けて王様の前にいた爺さんが本題に入りだした。ここで博人は考える。この展開はもしかや…今博人の脳内では、異世界に召喚され、魔王を倒してくれた的なことが起こるんじゃないか。等と考えていた。

「まさかなあ…そんなことないよな…」

だが、現実とは全く違うものだった。

「この先にある戦いで共に戦ってほしい」

「……………は？」

話を聞く限りでは、この国、デイスリアは技術の国と呼ばれ、数多くのものを作り出してきた。

その中には戦いの道具が多く含まれる。

それに 異世界からの召喚技術も

博人は爺さんによつてこの世界に召喚されたようだ。

その技術を他の国に見せつけるため、戦いを仕掛けるといふことらしい。

森の中で見つけた朽ち果てた機械人形、あれもこの国が作り出したものだった。

機械人形に意志を持たせようとしたらしい。その結果意志を持った機械人形たちは暴走し、大陸へと散って行った。

今では機甲人と言う種族として大陸のどこかにいるそうだ。

森にいた機械人形は暴走した後、ここの人間たちによつてあの場所で破壊され、そして捨てられた。

話を聞いていた博人は段々と怒りが込み上げてきた。

自分たちの力を自慢するためにほかの人を殺せ？ ふざけるな。

勝手に作り出して言うことを聞かないから破壊？ さらにふざけるな！

こんな奴らのために俺はこんなところに来たのか？
こんなことをするために俺は呼び出されたのか？

ふざけるな。本当に

「ふざけんなああああッ！」

「ッ！！！」

博人を中心に怒りが爆発し、空間が揺らいだ。

その衝撃により部屋の窓がガタガタと大きく揺らいだ。中には割れ落ちたものもある。

「……………てめえら…そんな理由で俺をこんなところに連れてきたのか？」

俯いていた博人がゆっくりと王の方を向いたその表情は……………何もなかった。

無表情、だがその奥にあふれ出ている怒りは抑え切れていなかった。

「貴様、王の前でなんという…ッ！」

一人の貴族が博人に抗議しようとしたが途中で言葉が詰まってしまった。

博人が目だけを動かし、こちらを見ていた。

その表情、目に恐怖し、言葉を続けることができなかった。

「なあ、俺はそんなことをするただけにここに連れてこられたのか？」

「ああそうじゃ。召喚術は他の世界の強者を呼び寄せることができる。

その力を他の国に見せつけてやるのじゃ。」

「どうだ？共に戦ってくれぬか？」

……………何て自分勝手な……………ああ、今なら機甲人たちの気持ちがよくわかる……………

「その力、今この場でめえらにみせてやるつか…？」

博人は片方の腰の刀に手を添え、いつでも刀を抜けるよう構えた。

「なッ！ おまここがどこだかわかっておるのか！」

ヒュインッッッ！

「んなもん関係ねえよ」

「ッ！？」

爺さんが言葉を言い終わると同時に博人は爺さんの首筋に刀を添えていた。

その光景を見ていた者たちは騒ぎ出した。

やつは今なにをした。

いや、あいつはいつ動いたんだ。

博人の動きは周りの誰にも見ることができないほど速かった。

「何事です！！」

部屋の入り口にいた兵士が騒ぎを聞きつけ、駆け込んできた。

「へ、兵士たちよ！こやつを捕えよ！」

刀を添えられている爺さんが兵士たちに叫んだ。今自分のいる状況に気付かないまま。

「よくこの状況でそんなことが言えるな」

ヒュパアアンツツツ！

博人は添えていた刀をそのまま振り切った。

その結果、爺さんの首が飛び、辺りに赤い雨を降らせた。

「き、貴様！ よくもバルト様を！！」

刀を一度振り払い、ふり返った博人の目に入ったのは駆けつけた兵士たちだった。

その数約30人。

数が多いな……

博人は数秒どうするか考え、もう片方の刀を抜いた。そして右の刀を右肩に、左の刀を右脇に添え、叫んだ。

「二刀流第一奥義、裂衝斬破ああ!!」

ズババアアアンツツツ!!

左の刀を左上へ、続いて右の刀を左下へ勢いよく振り切った。

その衝撃により、床は大きくえぐれ、兵士たちの大半は大きく吹き飛ばされ壁にたたきつけられた。

激しくたたきつけられた為、しばらくは起きてこないだろう。

博人は刀を鞘に仕舞うと窓へ向けて走り出した。

そして大きく踏み込み

パライイインツツツ!

「なッなんだと!!」

博人は窓から隣の建物へ飛び移り、走り去った。

「追え! 追うんだ!!」

起き上がっていた兵士たちは博人を捕えるため一斉に追いかけていった。

静寂に包まれた部屋には茫然とする王たちと赤い溜まりの中で首の無い体が横たわっていた。

第三話・進むその先に・（後書き）

まだ続きがあつたんですがこれ以上長くなる前に一端終わりました。まだ続きますのでよろしくです。

ちなみに主人公博人の奥義はまだあるので後々出していこうと思います。

第四話・現れたもの・（前書き）

やっちゃまった…

今回も長くなってしまった…

こんなですがどうぞよろしくです

第四話・現れたもの

- 現れたもの -

日は傾き、徐々に静寂が支配しつつある街の中、慌ただしく走り回るものたちがいた。

「我々は向こうを探す。おまえたちは向こうを探せ！」

「わかりました！」

逃げた博人を探す兵士たちだった。兵士たちは路地から大通りに出るとそれぞれ別の方向に走り去った。その兵士たちが出てきた路地の奥に動く影があった。

そこにはやっぱり貫風 博人である。

「面倒なことになったなあ。勢いのあまり殺つちまっただけど…悪いのは向こうだしいいよな。うんいいな。」

人を殺めといて何を言ってるんだという声も聞こえなくもないが博

人は自身を正当化し自己完結した。

「国王も気に食わないけど、一応この国の王だし、街の人たちにはなんの罪もないもんなあ。」

この街も見て回りたかったけどしょうがない、適当にほかの所に行くか。来た道を逆に歩いてればいずれ着くだろ。」

国の王に刃を向け、さらには王の前で人を一人殺めてしまっている博人にこの街での居場所はなかった。

今でも博人を捕えようとたくさん兵が街の中を探し回っている。そのため博人はこの国を離れ、別の国、別の街に行くことにした。この大陸に他の国があることは国王の召喚についての話の中で出てきたのであることは知っていた。

ただ、それがどこにあるのかまでは知らなかった。

「何とか街を出ればなあ。その前にとりあえず今の状況を何とかしないと。」

博人は何とか街を出るため、兵士たちに見つからないように移動することに決めた。

その先であんなことになるうとは、予想だにできなかった。

細い路地を移動中、博人は嫌なものを見かけてしまった。

それは黒いゴスロリチックな服を着た少女が複数の野郎どもに囲まれ、今まさに襲われようとしている所だった。

「どこの世界でもあんな奴等はいるんだな…気にいらねえ…」

博人は博人は少女を助けるため、駆け出した。

「まったく、手間掛けさせやがって……」

「や……来ないで……」

「いいからこっちに来てもらおうか？」

一人の男が少女に手を伸ばそうとした。が

「はい、ここでストップ俺登場！」

シャキーン！という音が聞こえた気がするが博人が少女と男たちの間に割って入った。

「」「」「」

……おう……やっちまったぜ……

「おいにいちちゃん、そごいしてくれねえか。」

右にいた男が何事もなかったように言ったきた。

「いやいやそういつ訳にはいかんのよ。こんな所見て見ぬふりできんだろ。」

「そうかい、邪魔するってんならしょうがない。痛い目見てもらうしかないよなあ。」

そういうと男たちは背中や懐からナイフや短剣を取り出し、こちらに向けてきた。

それに対し博人は

「てめえらこそ、肉塊になる覚悟はあるんだろうな。」

鋭い威圧するような目で刀を一本抜き、男たちに突き付けた。

「な、なんだよそのでかい剣は……」

べつやらの世界には刀と言つものがないらしい。

「さあ、掛かってこいよ。そっちの刃が届く前にこっちは切り裂い

てしまうけどな。」

「くツ、くそ！、覚えとけよ！いくぞおまえら！」

博人の目、刀の大きさに怯んだ男たちは捨て台詞を吐きながら逃げ帰った。

「なんだあつけない。まあ騒ぎにならなかつたからよかつたけど…おっと、そういえば大丈夫か？」

博人は刀を鞘に納めると振り返り、少女に問いかけた。

「はい…あ、ありがとうございます…」

「気にすんな。暗くなると危ないからな。気をつけるよ。それじゃあうづえいい！」

博人は少女の無事を確認しその場を走り去ろうとした。が、通りをちょうど兵士が通り過ぎたため壁に張り付きやり過ぎた。

「あの…大丈夫ですか…？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「もしかして、追われてるんですか…?」

「まあ…ね。いろいろあってね…」

「…」

博人の言葉に少し考えた後、少女は予想外の質問をしてきた。

「あの…一緒に行ってもいいですか?」

「…え?」

この子はいったい何を言っている。追われていると言っているのに一緒に行動しようとは何を考えているんだ。と

博人は少女の問いに返答できずに固まってしまった。それを察知したのか少女は付け加えるように言った。

「私も…追われているので…」

「それは…どうして…?」

博人の問いに少女は答えた。

「どうやら少女はある国の王の娘らしい。しかも対立関係にある国の為、娘を捕え相手の国に対しての人質にしようとしたようだ。」

…本当にこの国のやつらは腐っている。
そして追手から逃げている途中にあの男たちに捕まったようだ

「いや…でもなあ。」

「ダメ…ですか…？」

「グフアツ!？」

博人は返答に迷っていると少女がトンデモナイ攻撃を仕掛けてきた。

な、なんだあれは…なんなんだあれは…!

くそ! デイスリアめ、こんな兵器までも作り出したのか! ! 強すぎる… 威力が半端ないぞ! !

なんだあの潤んだ上目使いで「ダメ…ですか…?」だと! ? 周りにキラキラしたものが見えたぞ…! 。

だが俺は屈する訳には

「ダメなんで…しょうか…?」

うるる〜

「…いいよ…一緒に行くろうか…」

「」

はい、お疲れ様です。トドメが来ました。負けました。勝てない。あれには勝てないさ。

「私、アリヤと言います…アリヤ・ローゼルトです。」

「ああアリヤ、俺は貫風博人。博人でいいよ。とりあえず俺はこの国から出るんだが、いいのか？」

「はい…いいです。もうここにはもう用はないので…」

「じゃあ行くか。見つからないようにな。」

「はい。」

博人は少女と共にここに来るときに通った大きな橋を目指して駆けていった。

博人たちは何とか誰にも見つからずに橋まで辿りついた。
もう大丈夫だろう、そう思い橋を渡ろうとした。が一人の男が現れ、
その後ろからさらに六人の兵士たちが現れた。
その男に博人は見覚えがあった。

「止まれ、青年。」

「でたな門番A……」

「だから俺はシャウロだ!!」

だが名前までは覚えていなかったようだ。

「悪いが青年、何があったのかしらんがここを通すわけにはいかんのだよ。ここでおとなしく捕まってもらえないか？」

「悪いな。こっちは捕まる訳にはいかんのよ。戦うために連れて来られたんじゃ尚更ね…」

「どづいうことだ？」

「さあな。上の者に聞いてみな。すべてわかるだろうよ。」

そう言い博人は刀を二本抜き、構えた。

それに対し門番Aのシャウロを筆頭にそれぞれ武器を抜いた。

そして同時に走りだし、

突然に、周りの空気が変わった

「「「なッ!!!」」」

いや、違った。圧倒的な威圧感が周囲を支配していた。まるで自身の周りの重力が強くなったような、立っているのがやっとなような状態だった。

「な、なんだこれは…!!」

その威圧に耐え切れず、シャウロの後ろにいる兵士たちは泡を吹き崩れ落ちていった。

何が起こっている…？

そう思っていた博人の前の空間が突然 黒く歪んだ。
威圧を発しているのはその歪みの中からだった。

そしてその歪みから、一人の男が現れた。

見ただけでわかる。この男…強すぎる…

「ま、魔王グリフェウス…どうしてここに…？」

威圧に何とか耐えていたシャウロが怯えながら答えた。

何！？魔王だと！？なぜどうしてこんな所で出てくるんだ！！こんなのに勝てる訳ないだろ！

博人はそう思いながらも最大の警戒を解かず本気で対峙していた。

そして、魔王は鋭い目で博人を見ながら口を開いた。

「貴様、私の娘に何をしている……？」

「…え？」

ええええええ！！！！

第四話・現れたもの - (後書き)

はい、ヒロイン登場です。

ついでにお父さん登場です。

お父さん怖いです…

第五話・行き着く所・（前書き）

遅れちゃいました。

やっぱり書くの難しいですね…

さて、お父さんが登場です。

よろしくです。

第五話・行き着く所

- 行き着く所 -

「…え？」

博人は今日の前にいる男の言うことが一瞬、いや数秒ほど理解できなかった。

それもそうだろう。突然目の前に現れ、その第一声が「私の娘に何をしている…？」では理解できるはずが無い。
そしてその娘と言うのが

「え〜と…お父さん？」

「うん…パパ…」

さっき偶然助けた女の子だったとは…

「マジかよ…とまってええッ!？」

なんということだ…と思ひ溜息を吐きつつ魔王の方へ向き直った博人が見たのは、鬼の形相でこちらに向かつて腰にあった黒い禍々しい剣を振り上げているお父さんだった。

博人はそれを何とか刀を横に構え受け止めた。

「娘に近づく害虫どもはこの私が始末してくれるわ!!」

「ちょッ、待つて下さいお父さん!!」

「誰がお父さんかああ!!」

ああもうこいつめんどくせえ!

博人はつばぜり合っていた剣を押し返し、距離を取ろうとした。が、お父さんがそれを許しはしなかった。

お父さんは押し返された剣をそのまま右から横薙ぎに切り払ってきた。

反応が遅れた博人は何とか受け止めることはできたが大きく後ろへと吹き飛ばされた。

ピシッ…

剣を受け止めたとき、何か小さな、本当に小さな音が聞こえた。

だがその音はまわりの風の音や衝撃の音で博人には聞こえてはいなかった。

「くッ!なんて力だよ! おいアリヤ、お父さん何とかできないか

「？」

「…やってみる。」

しびれる腕で何とか体制を立て直しつつ、博人は娘であるアリヤにお父さんを止めるように頼んでみた。
すると、ちよっと頼りないが何とかしてくれるようだ。

「貴様のような人間」
ごときが私の娘に近づくとは、許さん！許さんぞおー！！」

「パパ…何やってるの？」

「おおアリヤ。ちよっと待ってなさい。すぐにあの害虫を始末してやるからな。」

「パパ、何をやってるの？」

「な、何すぐに終わる。そこで待ってなさい。」

「パパ、何を、やって、いるの？」

「ア、アリヤ？」

「もう口きかないよ…？」

「ちよ、ちよっとまでアリヤ！待ってくれ！すまん！許してくれ！

！…！」

なんだあれ？

博人は呆気にとられていた。

さっきまで本当に怖かったお父さんが娘に対して頭を下げて誤り続けているのを見てると急にみっともなく見える。

この様子を見て博人は思った。

こいつ親バカだと。

それも超がつく程の親バカだ。

「これは、一体どういう状況だ？」

お父さんが娘に謝り続けている状況の中、ほぼ空気と化していた門番Aもといシャウロが聞いてきた。

「いや〜：なんとというか、なんだろう？娘の心配しすぎなお父さんが：なんだろう？」

博人自身どう説明していいかわからずあいまいな答えしか出せなかった。

その後アリヤの説教を受け、お父さんはだんだんと小さくなっていった。

*
*
*
*
*

*
*
*
*
*

「終わったよ。」

そういいアリヤはとてとてとどこちらに歩いてきた。
その後ろでお父さんが真っ白になっていた。

頑張っ、お父さん…

「…あ、愛されていますね…」

「迷惑してるんだけど…」

「それだけ大切に思ってもらってるんだ。いいことじゃないか。」

「度が過ぎる…」

まあそれは、ね。見ててわかるけど。

だんだんとお父さんがかわいそうに見えてきていた博人であった。

「とりあえず、あれ何とかしないとな」

博人の言うあれとは今にも崩れ落ち、灰となって飛んでいきそうなお父さんである。

「あの〜大丈夫ですか？」

「アリヤが…私のアリヤが……」

緊急事態発生。お父さんが危険である。このままではまずい、そう思った博人はあの言葉を言ってしまった。

「ちょッ、大丈夫ですかお父さん!？」

「お父さんだと！？娘はやらんぞぉー！！」

お父さんは急に立ち上がり、掴みかかってきた。元気じゃないっすか。

その様子をアリヤはすぐ横でじっと見ていた。

「パパ…？」

「ッー！なんでもないぞー！うんなんでもないぞアリヤ！」

そついい、お父さんは手を放した。震えてはいたが。

「アリヤ、この人間はなんだ？なぜ共にいるのだ？」

「さつき危ないところを助けてくれた…」

「何？、こいつが？」

「うん」

アリヤは何があったのか、なぜ博人と共にいるのかを話した。

「娘を助けてくれたのだな。礼を言う。だが娘はやらんぞ。」

「いや、偶然あの場所にいただけなんで」

お父さんは話を聞き、博人は娘の恩人だと知り礼を言った。
最後に言ったのは特に気にせず博人は言葉を返した。

「さあでは帰ろうか、アリヤ。」

「…ちよつと待って」

娘を見つけ、いざ帰ろうとしたグリフェウスをアリヤは止めた。
そしてこちらに向かつて歩いてきた。

どうした？そう聞こうとした博人より先にアリヤが口を開いた。

「一緒にいこ？」

「えッ？」「なにい！？」

博人、グリフェウスが同時に驚きの声を上げた。

これはつまり、魔界に行こうと言うことか？人間の俺が行ってもいいの？隣の国に行こうと思ってただけ？博人の中にいろいろな疑問が生まれ、返事ができなかった。

一方グリフェウスは

「までアリヤ！どづいつことだ！？こやつを連れて行くなどとは！？」

「ダメ…？」

「グフオア…！」

出た。出ました。アリヤの最強兵器潤んだ瞳で見上げてみよう攻撃。魔王すら一撃の必殺にかなう訳もなく

「…好きにしろ…」

「」

「どづいつこと一緒にいじ。」

「え？ あ、ああ」

博人の知らない所で行くことに決まっていた。
そのことを知らない博人はあいまいにうなずくしかできなかった。

「どづろであいつはどづするのだ？」

グリフェウスの指す方向を見ると、シャウロが立っていた。

「え〜と、どうするんだ？」

「今それを聞くか。魔王が出てきたんじや俺にはどつじよつまできんよ。好きにするといい。」

そついい、シャウロは歩いて行った。

「では行くぞ。」

グリフェウスはそついい、目の前に手を向けた。すると目の前の空間が黒く歪んだ。

グリフェウスが出てきた時に見たものだった。どうやら転移魔法のようだ。

「わかった」

博人は中に入るため、刀を仕舞った。右の刀を仕舞い、左の刀を仕舞い

ピキィィィン

鞘に半分まで納まったところで

刀が半ばから折れた。

「え、マジで？」

「パパ…？」

「わ、私の所為か？」

第五話・行き着く所・（後書き）

主人公魔界に行っちゃいますね。

それと刀が…ね

この後どうなるか…というかどうかどうしよつか
頑張っていこうと思います。

第六話・これからの事・（前書き）

難しい・・・

書きたいことがうまく書けないという事態に陥ってしまっている晴

ノ叢雲

です。

更新の方遅れてしまい申し訳ないです。

これからも不定期になると思われますがよろしくです。

第六話・これからの事・

・これからの事・

魔界 それは、黒雲が立ち込め、暗闇に覆われた世界。そして悪魔、魔族が住む世界。
そこに住む魔族は恐ろしく、人々から恐れられる存在である。
そして、魔界の頂点、魔王は世界を征服するために人々を襲い、殺戮を繰り返す。

「と、思ったんだけど……なあ。」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

しかし今現在、その魔界を歩く人間がいる。

もちろんそこには貫風 博人である。

博人が疑問に思っていること、それは

「お、グリフェウス様お帰りなさい。おや、娘さんも一緒に。」

「魔王様、寄って行きませんか？」

「おや、アリヤちゃん今日もかわいいねえ。」

親しみやすく話しかけてくる魔界の住人たち。

まるで優しい八百屋のおじさんのような…トカゲっぽいごついおじさん。

所々に人間の姿が見えるし…

…ここ、魔界だよな…

はっきり言おう、ここは城下町かと。

思っていたイメージとはかけ離れていた現実が、そこにあった。

「なんか、平和そうなところですね。」

「それはそうだ。私たち魔族は争いをせんからな。いろんな種族のものがここには住んでおる。」

とお父さんが説明してくれた。

争いをしないって、イメージからさらに離れて行ってしまったな。

「小僧、今私の事をお父さん…だと…？」

「いえいえ！言ってませんよー！！」

…鋭い…無駄に鋭いぞ…！

「ふん、さっさとついてこい。」

「あ、はい。」

と言い、ついて行くつもりとしたちよつどその時、隣に立っていたおばさん？が言っではいけないことを言ってしまった。

「お、アリヤちゃんこんにちは。おや、そっちは彼氏かい？」

ピシッ…

…時が…止まった…博人とお父さんの。

今この人…人じゃない…おばさん？はなんと言った！？

俺が彼氏だと…？

あのお父さんの前でなんということ…！！

あ、お父さんから目にはつきりと見えるオーラが…黒い魚のオーラがドツとあふれ出した。

「小僧……」

ほら来た！やっぱり来た！！当然来た！！！！

「飛び散る覚悟はできているか……」

「いやいや！俺何も言ってますんよ！！てか飛び散るってどういふことっすか！！」

「問答無用！！！！」

黒いオーラをまとったお父さんが腰の剣を抜き、切りかかってきた。

くそ！理不尽だ！！

内心そう思いながら何とか受け止めようと思い一本の刀に手を伸ばし引き抜いた、が、博人はあることを忘れていた。

「くそ！ツて短か！？そうだった！！折れたんだったアツー！！！！」

ドカーーン!!

博人は吹き飛ばされた。

黒いオーラをまとったお父さんの攻撃は何とか折れ残った部分で受けたため、致命傷にはなっていなかった。

このままではマズイ。マジでマズイ。主に命的にマズイ。そう思い黒いオーラをまとったお父さんを止められる唯一の人物に助けを求めた。

「アリヤ！お父さん止めてくれ!!」

「誰がお父さんかあああ!!」

もういいよ!!

とりあえず黒いオーラ（ryお父さんは置いといてアリヤに目を向けた。そこには、

「／／／ポツ／／／」

頬を赤く染め、俯いているアリヤがいた。

……え、なにあのリアクション。なぜアリヤは頬を赤く染めているんだ？どうして俯いているんだ？

博人は思考が追い付かず、フリーズしてしまった。
しかし博人はすぐに現実に引き戻された。

「ふ…ふふふ…」

あのお父さんが不気味に笑っていた。もう一度言おう、お父さんが笑っていた。

剣を持っていない方の手で顔を覆い、その隙間から除く目は明らかに据わっている。

そしてまどっていたオーラの色が黒から赤紫に変わっていた。

「ふフフ、コゾウ、ドウヤラトビチルだケデハタリナイヨウダナッ
!!!!」

怖いよ!!

「いやいや、飛び散るだけでもいっぱいですよおお!!」

そして再び博人と赤紫のオーラをまとったお父さんが衝突した。

お父さんの理不尽な攻撃が終わったのはあれから30分後だった。
止めたのはやっぱりアリヤの一言だった。

アリヤに呼ばれたお父さんがアリヤに近づき、耳元で何かを囁くと
お父さんが急に白くなり、崩れていった。

そのまま動かなくなっただけ……って不味いんじゃないのか!?

…何を言っただんだ…

何とか落ち着いたところで最初の目的であったお父さんとアリヤの
住む家、まあ城なのだが向かうことにした。

その道中、博人はお父さんにある命掛けの質問を試してみた。

「あの、アリヤって見た目子供ですけど彼氏と違ってわかるんですか？」

ギン！と振り返るお父さん。やっぱり怖い！けど最初ほどの迫力が
ない。

相当精神にきているようだ。
何とか命は助かったようだ。

「小僧、アリヤをいくつに見ている？」

「え、10〜13くらいじゃないんですか？」

「やはりそう見えるか。だがアリヤはもう85になる。」

なん…だと…？

「魔族は人と違い寿命が長いのだ。人の歳で言うならアリヤはもう
17だな。」

マジかよ…あれで俺と同じかよ…

見た目と年齢のギャップにあきれる博人であった。

第六話・これからの事・（後書き）

博人とアリヤの歳がわかりました。

あれで同じとは・・・よいではないか。

お父さん優しいときは優しいんですけどね・・・
娘の子になると大変です。

次は旅に出ようかなと考えている晴ノ叢雲です。

第七話・最初の目的・（前書き）

大きく日が開いてしまった：

申し訳ないです。言い訳になります。が学校の製作の方に手をかけて
中々更新ができませんでした。

またも更新不定期になります。が、なにとぞです。

第七話・最初の目的

・最初の目的

「あらあら、まあまあまあまあ。」

城についた博人たちを出迎えたのはたくさんのメイド達とやたらとまあを連発するきれいな女の子だった。

身長はアリヤより少し高いくらいでまだ子供っぽさが残る顔立ちの女の子。

どうやらアリヤのお姉さんのようだ。

「帰ったぞ、アリス。」

「はい、お帰りなさい。あなた。」

…

……

……………え？

おっとどうやら長旅で疲れているようだ。幻聴まで聞こえ出した。さすがにこんなにも若いお母さんはいないだろう。うん、だろう。

「ただいま。ママ……」

「はい、お帰りなさい。アリヤ。」

前言撤回。どうやら幻聴ではなく本当にお母様のようだ。てかお母さん若すぎだろ……

お父さん、これはダメでしょ……

そんなお母さんの若さに驚いている博人に気付いたのか、アリスは博人の前まで歩いてきた。

「娘の危ないところを助けて下さったんですね？ええと……」

「あ、えっと、貫風博人です。」

「そう、博人さん。本当にありがとうございました。どうぞゆっくりしててください。」

「はあ、どうもっす。」

優しそうだけどものすごいポワポワした人だ。博人は最初の印象でそう感じた。

「では、こちらへどうぞ。」

メイドさんの一人がやってきてついてくるように行ってきた。どうやら部屋に案内してくれるようだ。

それに対し博人は軽く「あ、はい。」と答え、ついて行こうとした。

そう、ついて行こうとした。が、行くことはできなかった。後ろから聞こえた言葉によって。

「それにしても、アリヤが男の子を連れてくるなんてねえ」

その言葉を聞いた博人はメイドさんについて行くために歩き出そうと片足を上げた状態で固まった。

そしてゆっくりと振り返って目に入ったものは、またも黒いオーラをまとったお父さんと、娘が男の子を連れてきたことに嬉しそうなお母さんの笑顔だった。

あの人はわかっていて言っているのか!?

いや、たぶん悪気はないんだろうな…超ポワポワしてるし……

そしてこの後に来るのは、

「小僧……」

やっぱり来たあ！

てかついさっき同じことがあったし。

「どうやら飛び散りタリンヨウダナ……」

「いや！だから俺は何も言っただけ……」

お父さんが一瞬で目の前まで近づき、腰の剣で切りかかってきた。やばい！避けられない！そう思った博人だったが、

「ア……タ……」

不意に声が聞こえた。と思ったらお父さんがビクツと驚き、固まったと思つたら冷や汗をダラダラと流しだした。博人は声が聞こえた方を見ると、とてつもなくいい笑顔のお母さんがいた。

「何をしようとしているのかしら〜?」

「い、いや!この小僧が…」

「あひら〜?」

「だ、だからだな…」

「あひらひらひら〜?」

お父さんの言葉をあらら〜で遮り、笑顔でゆっくり近づいてくるお母さん。

マジ怖いです…!…!

「な、何もせん！何もせんよ！」

「ふふ、本当ですかあ〜？」

「愛しているぞ。アリス。」

「はい、あなた〜」

あ、無理やり終わらせやがった。てかそれでいいのかわか
らな。まあ助かったからよかったけど。

「では博人さん、ゆっくり休んでくださいね。」

「は、はい…どうもっす…」

その後メイドさんによって部屋に案内された博人はようやくゆっ
くり休むことができた。

その日の夜、博人はお父さんに追いかけて回される夢を見たり見な
かったり…

そして次の日

博人はグリフェウスとアリスの前にいた。つまりは王室である。

そこで博人はここにやってきた事情と今後のことについて話していた。

博人は現在、無理やり異世界に連れてこられた身であるため、身を落ち着ける場所がどこにもなかった。

その話を聞いたアリスからありがたい提案がでた。

「ならここに住めばいいじゃないの。」

「何!?!」

ちなみに今驚きの声を上げたのはお父さんのグリフェウスである。

「いや、それはありがたいんですけど……」

「それにアリヤだってその方がいいでしょ?」

「うん……」

「待てーい!?! どういうことだ!?! この小僧をここに住まわすだと! このアリヤに手を出そうとする小僧をここに、アリヤと、一緒に、住まわせるだど!?! 私は認めんぞ!?! そんなのは認めんぞおおお!?!」

お母さんのアリスとアリヤが賛成なのに対し、お父さんがすごい勢いで反対の抗議を言い出した。

お父さんは断固として認めたくないようだ。

しかし、横に座るお母さんの顔が徐々に笑顔になっていき、

「ア〜ナ〜タ〜?」

ビクウウウ!!

お父さんが大きく跳ねた。

「いやしかし！これだけは認める訳には……！」

「あらららら？」

「グツ！？だ、だが……！」

冷や汗を流すお父さんは何かにすぎるように周りを見渡し、見てしまった。

目に涙を溜め、潤んだ瞳で見上げ見つめるアリヤの姿を……

「……………ブルウアアアアアアア……！」

急所に当たった……！！

お父さんに大ダメージ……！！

お父さんは崩れ落ちた……！！

お父さんは燃え尽きた……！！

「……………」

「……………」

「でも…やっぱりすみません。」

だが博人はその提案を申し訳なさそうに断った。

「俺、一度この世界を見て周りたいたいんすよ。」

「あら、そうなの?」

「はい、だから、やっぱり…」

「なら、見て周ったらここに帰って来なさいな」

「え…?」

「ここはもうあなたの帰る場所でもあるのだから、いつでも帰ってきなさいな」

「…はいッ…!!」

その優しさに思わず涙がこぼれそうになった。

博人は一度俯き、大きく深呼吸をすると元気に返事を返した。

「ならまずはどこに行くのかしら?」

「いや、まずその前にこれを何とかしないといけないんすよ…」

そう言い、博人が取り出したのは半ばから真つ二つに折れた博人の大太刀である斬馬刀だった。

「あらら〜大きな剣ね〜でも折れちゃってるわね？」

「実は……」

博人はこうなつた経緯をアリスに話した。
するとアリスはまたも笑顔になっていき、

「あらら〜ア〜ナ〜タ〜？」

「ど、どうしたんだ？アリス？」

と言い、立ち直りきっていないお父さんの元にゆっくりと近づいて
行き……

この日、城中にグリフェウスの悲鳴が聞こえたと言つ……

第七話・最初の目的・（後書き）

旅に出られなかった…!!

お母さんのアリスさんの設定が中々うまくいかず、ちゃんと進めな
かった！

次こそ、次こそは旅に出るつもりです。

第八話・旅立ちの共・（前書き）

テクスチャを描くため、ペントタブを買った晴ノ叢雲です。

箱を見て、ちょうどいい大きさだと思いつつ店員さんに大きさこれくらいですかと聞くと、そうです。と言われたのでちょっとまけてもらい購入しました。

いざ開けてみるとなんと箱の大きさの6/10の大きさでした…返品しようにもまけてもらっているから言いにくい…やってしまった…

とすいません。私の無駄話申し訳ないです。

さて、今回前より早く投稿ができました。まあ前のが遅すぎたんですが…

今回もなにとぞよろしくです。

第八話・旅立ちの共

- 旅立ちの共 -

「では、行ってきます。」

「はい、行ってらっしゃい。」

「…道中気を付けるのだぞ。」

魔界 ローゼルト の東門の前、そこから旅に出る者とそれを見送る者がいた。
見送る者は魔界の王、グリフェウス、とその妻アリスとその娘のアリヤである。
そして旅に出る者、どうもみなさん貫風 博人である。

「…え?…」

「む?なんだ?」

「いや、その…心配してくれるんだなあ…と。」

「ふん！小僧がどこでくたばろうが知ったことではない！だがアリヤが心配するだろうから言っただけだ！勘違いするでない！」

うわあ…

ツンデレ頂きました。

あまりうれしくないもらい物もらった博人は、はは…と乾いた笑いを浮かべた。

そんな博人にアリスは「一応心配はしているんですよ。」と言う。

ホントかなあ。と疑問に思いながらも「そうですね。」と答えた。

「ふん。行くならさっさと行け。私はこれから家族水入らずでゆっくりと過ごすのだからな。」

と、にやけながらグリフェウスは語る。

はいはいそうですか」と内心思いながら、博人はそれでは。と軽く頭を下げ、足を踏み出し、歩き出した。

ザッ

ザ…

ん？

二歩程歩いたところで何か違和感を感じた博人は後ろをゆっくりと振り返った。

そこに映ったのは横に並ぶグリフェウスとアリス。そして前に二歩程足を踏み出したアリヤがいた。

「ア、アリヤ？どこに行くんだ？」

お父さんが震える声で恐る恐るアリヤに問うた。

「一緒について行く。」

「「なッ!!!」」

アリヤの爆弾発言に驚くグリフェウスと博人。アリスはわかっていたかのような笑顔だった。

「ア…ア、アリヤ？何を言っているんだ？」

「博人に一緒について行く。」

まるでこの世の終わりのような顔をしながら、またもグリフェウスはアリヤに問うた。

それに対し今度ははつきりと返すアリヤ。しかも名前まで入れて。

「小僧！…どういうことだ！…！アリヤに何をしたあ！…！！！」

「いや！知りませんよ！…俺もどういうことか！…てか何もしてないっすよ！…！」

今度はこつちに向き直り、鬼の形相で詰め寄ってくるグリフェウス。それを博人は必至に、必至に押しとどめる。そんな本気で危険な博人にアリヤは追撃を打ち込んだ。

「博人、いいつて言ったよ？」

ええ！？

いや、俺がいつそんなことを…まったくもって身に思えないんだが……

「ふふふ…小僧…私に嘘を吐くとは大したものだ…覚悟はいいだろうな？…！」

「いやだから！言ってますんて！…！」

「ならば私のアリヤが嘘を言っているとしても言つのか？」

「いや…それは…」

「博人……いいって言ったよ……？」

お父さんの前で涙目になりながら、再度同じことを言うアリヤ。お父さんの前で。

うっ……俺が悪いのか？そんな顔をされるとすごい罪悪感が……

「……小僧、私に嘘を吐いた揚句、私のアリヤを泣かすとは、塵と化する用意はできているか……？」

「だから！ちょっと待って下さいってーッ！！」

存在ごと消されそうになりながらも博人は何とかグリフェウスをアリスに頼み、アリヤに話を聞いた。後ろでグリフェウスが言葉に表せない奇声を発していることにおびえながら。

「アリヤ、どういうことだ？俺、そんなこと言ったか？」

「うん。デイスリアの街で……」

デイスリア 博人を戦いのためだけに、召喚した街。そして、アリヤと初めて会った街。

「あの街で…言ったか？」

「博人が助けてくれたとき…一緒に行ってもいいですかっ」

「ああ。たしか言ったな。」

「そしたら博人はいいよって。」

「うん。言ったな…
ってあれそついう事だったのか!？」

「うん。」

「いや!あれは一緒に街から出るまで一緒ってことじゃなかったのか!？」

「ううん。博人と一緒について行くってこと。」

なん…だと…?
そんなつもりで言ったんじゃないんだが…
てかそんなのわかんねえし!

「いや、でもなあ…」

「…ダメ?…」

「グッ!？」

クア！？

さっきの涙がまだ残っていたようだ。アリヤは潤んだ瞳で見上げてきた。

そう、デイスリアの街で受けた潤んだ瞳攻撃がまたやってきたのだ。しかし同じ攻撃はそう何度も通用せん！通用せんのだあ！！……たぶん。

「ダメ…かな…？」

うるる

「……ゴフツ……」

まだまだ！まだやられんよ！！

この攻撃さえ凌げばあとはもう大丈夫だ！

と吐血しつつ博人はアリヤの攻撃に耐えていた。が、

「……グス……」

「……グフォアア…！！」

アリヤのオーバーキル！！

本格的に泣き出したアリヤに博人の精神は耐え切れず、爆発した。

文字通り。

星が…ああ…星が見えるよ…

「グフツ…い…いいよ…行こうか…」

「」

爆発から何とか立ち直った博人はアリスに報告するためにアリスの下へ向かった。

お父さん？ふ、結果はもうわかっている。

「で、どうなりました？」

「なんか…言ってたみたいっす。」

「あら〜ならやっぱりアリヤも一緒に？」

「ということになりますけど…いいんですか？」

「私はいいですよ〜どうぞ一緒に連れて行ってあげて下さいな。」

「はあ…では、いってきます」マタンカアアアア…！！！！！！」おおう…！？」

アリヤ同行の許しをもらい、いざ旅立とうとしたところにグリフェウスの心の叫びが割り込んできた。

「認めん！！私はあ！！絶対に！！認めんぞおおおお！！！！」

グリフェウスが血涙を流しながら飛びかかってきた。

そんな度が過ぎる娘を思う父の叫びはもはや恐怖でしかなかった。

やばい！旅立つ前に旅が終わる！！

と感じ、博人はとつさに構えた。

が、グリフェウスの飛び込みがこちらに届くよりも早くアリスがグリフェウスの背後に回り込み、

「あらららア〜ナ〜タ〜？」

「ブフォア！！」

グリフェウスの足を掴んだ。

それにより、グリフェウスは顔面から大地へとぶち当たった。

いや、それよりもアリスの動きがまったく見えなかったことにも驚きである。

「それじゃあ、いつてらっしや〜い。」

「アリアアア！！アライイイヤアアアア！！！！」

グリフェウスの魂の叫びを背景に、アリスは送り出しの言葉を贈ると、博人は「い…行ってきます…」と言葉に詰まりながらも返し、歩き出した。

博人とアリヤの旅は、ここから始まる。

途中、アリヤが忘れ物といい、引き返したのは余談である。

第八話・旅立ちの共・（後書き）

旅に…出たのか？

旅に出たんだ。うんそうだ。

そう思いつつ、書き上げました。

さて、これから博人たちはどこへ向かうのか。
次回に続く、です。

第九話 - 秘めたる力 - (前書き)

夏休み初日にエントリーしていた就職先から残念通告が来た晴ノ叢雲です。

就職難：厳しいです。

さて今回休みとあり他より少し長くなりましたがどうぞなにとぞです。

第九話 - 秘めたる力 -

- 秘めたる力 -

アリヤと共にローゼルトを出て数時間。木々に囲まれた道を歩いて
いた博人はある気になっていたことを問うていた。

「なあ、アリヤ。」

「何？」

「それ…何？」

「どれ？」

「いや、それ。」

「これ？」

「そう、それ。」

博人が言うそれとは、アリヤが忘れ物と言い、一度取りに帰って持ってきた布に包まれた棒状の物である。

アリヤの身長を少し超す大きさで、上の部分が大きく膨らみ、下の部分は細くなっている。

ここまで来ればわかる人もいるだろう。だが博人はわからない。何故だろう…何故だろう…

「これは…」

アリヤは持っている棒状の物に巻いてある布を解いていった。そして現れたのは、

「杖。」

そう、杖である。膨らんだ部分の真ん中に宝石が埋め込まれており、形としてはロッドであろう。

「杖？何に使うんだ？」

「魔法。私、魔法使えるから。」

「えッ！？マジで！！！」

「うん…マジで。」

博人の「マジ」発言に「マジ」で返すアリヤ……かわいいじゃないか／＼

「へえ〜どうやって魔法使った？」

「魔法を使うときは杖に魔力を通してから、使う魔法の属性の精霊をお願いして呪文を唱えると使えるよ。」

「なる程、わからん。てか魔法なんてあったんだ。」

「うん。博人…一度見てるよ。」

「え？マジで？」

「うん。マジで。」

「またも「マジ」で返すアリヤ…やっぱりかわいいじゃないか／＼」

「そんな場面あったかなあ。」

「そういい、これまでのことを思い出す博人。」

「しかし、これと言って思い当たることはなかった。」

「パパと最初にあったときに、パパが使ってたよ。」

「おとう…おっさん（お父さんと言つと現れそうな予感がするため）と会ったときか？使ってたか？」

「パパ、あの時転移魔法を使って来たんだよ。」

「えッ！？あれ魔法だったのか？」

「うん。」

「へえ〜あれ魔法だったのか…あれ？待てよ？」

知らずの内に魔法を見ていたことに關心する博人。だがここで博人は疑問に思うことがあった。

「魔法使うとき杖に魔力通すんだよな？」

「うん。」

「おっさん、杖持ってたか？」

グリフェウスが現れるとき、その手には何も持っていなかった。アリアの説明では魔法を使うときは杖に魔力を通し、精霊に頼んで呪文を唱える。この手順が必要なはずだったがグリフェウスは杖を持っておらず、呪文を唱えた様子はなかった。

「パパ、すごい高位の魔道騎士だから無詠唱で魔法使えるし杖は剣になってるから持つてるだけでいい。」

なん…だと…？

どうやらグリフェウスは魔法使いの中で魔道騎士と呼ばれる杖の代わりに剣など、武器で魔法を使うランクらしく、その中でもトップの実力らしい。まあ一国の王なんだから当然なのだろうが。

そしてアリヤは魔導師のクラスであり、無詠唱はまだ無理だがかなり高位の実力のようだ。

これらにより、わかったことは、

「人は見かけによらないんだな。」

「？」

「いや、なんでも。それより魔法見せてくれよ。」

「いいよ。何がいい？」

「うん…なんでもいい。お任せで。」

「ん。わかった。」

そういい、杖を突き出すように前に構えるアリヤ。

杖に魔力を送ることによって宝石の色が変わり、ゆっくりを深呼吸をし、一言だけ囁いた。

きて

と

「おお…!!」

博人は思わず驚きの声を上げた。

博人が見たもの、それはアリヤの持つ杖の先に集まるサッカーボール程の大きさの水の塊、それが五つ杖を中心に回っている光景だった。

隣で驚きの声を上げる博人に微笑しつつ、アリヤは詠唱に入った。

「蒼き水 天より振りたり この地に恵みを

ウォーターレイン
水天降臨」

サアアアア

アリヤが詠唱を唱えると集まっていた水は空に上がり、大きく、細かく弾けるとあたり一帯に雨を降らした。

「おお〜スゲエ〜!!」

「

博人はアリヤの魔法によって振った雨に感激のあまり叫んでいた。
びしょ濡れで。

そしてアリヤは少し誇らしそうな顔で微笑んでいた。びしょ濡れで。

…

…

…

「……とりあえず乾かそうか……」

「じめんなさい……」

この後、アリヤの火の魔法で服を乾かした博人はアリヤにどうしても聞きたかったことを聞いた。

「魔法って俺でも使えるのかな？」

「…たぶん使えると思うよ。たぶん。」

「いやいや、二回もたぶんと言われると使えなさそうな気がするんだが…」

「どうやってたら使えるんだ？」

「杖に魔力を送ってから精霊と通じ合えれば…あとは呪文だけ。」

「魔力を…え〜と、精霊と通じ合う？どうやるんだ？」

「うう…グツとして…ムムツとしたら…ざわ…ってなる？」

「……OKわかった……」

正直…わかりません…

だがわかったと言わないとアリヤの目に水の精霊の力が…潤んだ瞳がやってくるだろう。あれには敵わない。よってわかったと言ってしまうのだ。

おそらく「グツ」って言うのが魔力を送るんだろう。そして「ムムツ」ってのが精霊にお願いすることだと思う。

「ざわ…」ってなんだ？てか俺には魔力はあるのか？

まあいいか。やってみよう。そう思いつつ博人は実践してみた。

「えと…杖は…これでいいかな？」

博人が取り出したのは、腰にある折れていない方の刀。これを杖とする、すなわち魔道騎士のやり方である。

「まずはこれに…グツと。」

刀に体の中にある何かを送る感じ。それをやってみた。すると刀は光を発し強く輝き出した。

「おお！これが魔力か？これでいいのかアリヤ？」

博人は確認のためアリヤに問うた。

しかしアリヤからの返事はなかった。

疑問に思いアリヤの方に振り向いた博人は、驚愕に染めるアリヤの顔を見た。

「どうしたんだ？アリヤ？」

「……すごい魔力……」

「え？これが？」

「うん……パパと同じくらい」

「え！？マジで！？」

「うん……」

今回は残念ながらアリヤの「マジ」がなかった……残念である。

「俺、そんなに魔力あつたのか…」

「博人…すごい…すごいよ。」

よせやい。照れるではないか／＼

「これで魔法使ったらどうなるかな？」

「やってみるの？」

「ああ、試してみるか。」

魔力を送り、精霊にお願い…属性は…風でいいか。いざ。

「え〜と…こつ…ムムっと（来い、風の精霊！）」

すると、そよ風が吹き、博人の周りに何かが集まる気配がして

ぞわ…ぞわ…

なんだと……！？

アリヤの言っていることそのままじゃないか!？

今博人の周りに見えない何か、だがそれが当たり前のような、それは違和感ではなくむしろ安心できるような何かがある。そこには集まっていた。

アリヤスゲエ…

「よし！これであとは……………呪文ってなんだ？」

「えと…こうしたいってのを思ってみて。そしたら精霊が教えてくれる。」

「なる。やってみるぞ。」

「（イメージは鎌鼬。風の刃を飛ばす感じで…いざ！）」

居合の構えで刀を持ち、それを、

「吹き抜ける風 見え無き刃 彼の者を刻め
無刃烈風スラッシュユウインド」

ヒュオオオオウウウウ！！！！

振り切った。

風の刃は高速で飛んでいき……………木々の間を音もなく通り去った。

「……………」 博人

「……………」 アリヤ

…………… あれ？失敗？切れた…のか？

確認するため、切ったはずの木に近づき…木をゆっくりと押ししてみ
た。

すると木はゆっくりと倒れていき…その奥の木に当たりドミノ倒し
のように倒れていった。
どうやらあの鎌鼬は音もなくきれいに切り去ったようだ。

ズズズウウウウン

わああ…キャーーーー！！！！

「……………」 博人

「……………」 アリヤ

またも無言の二人。

最初に口を開いたのは博人だった。

「これ…俺の居合か？」

「…ねえ、博人…」

「いやいや、魔法でやるとこんなになるのか？」

「博人…何か…」

「最初の居合とは全然威力が…」

「何か…聞こえ…博人？」

「でもこんな…博人！」 おおう！どうした？

アリヤのめつたにない大きな声に驚いた博人はようやく呼んでいる
アリヤに気が付いた。

「何か、聞こえなかった？」

「え？何か？」

「うん…悲鳴…かな？」

「…マジで？」

「…マジで」

アリヤさんのマジいただきました。

少し心配になってきた博人とアリヤは確認するため、倒れた木々に近づき、

「「あッ!」「」

そこには頭に耳が生えた女の子が目を回し横たわっていた。

第九話 - 秘めたる力 - (後書き)

現れた？謎の耳っコ。

彼女の正体とは！？さてなんだろう？

次話、その正体が…わかるのかな？

第十話・耳っ子・（前書き）

今回のタイトル・耳っ子・はどうかと思いましたが、これにする
とにしました。

耳っ子……いいじゃないか。という感じですかね。

耳っ子の場合、人の耳があるところについては触れない方がいいんで
しょうかね？

第十話・耳っ子・

・耳っ子・

「うう……んん………」

森の中の木々が開けた場所、ここで一人の少女が目を覚ました。どうやら意識を失っていたようだ。

周りを見渡してみると大きく、広く切り倒された木、それと自身を見つめる見知らぬ女の子。その奥の切り株を見ている同じく見知らぬ男。

「あ、起きた……博人〜」

「おっ？気が付いたか？」

少女が目を覚ましたことに気が付き、こちらに歩みながら話しかけてくる男、貫風 博人である。

「……あれ？……どこどこ？……どちら様……？」

「だったらああなるんだ！」

「いやあ〜自分でもああなるとは思ってなかったんだ。すまん。」

「軽！え！？軽！！危うく体二つになってたんだよ！！！」

「おお！よく無事だったな。」

「誰の所為だと思ってるの！？」

「え？…あ、俺か！」

「ムツカー…！！悪いと思ってるの！？」

「いや〜悪い悪い。」

「謝る気ないよね！ねえ！謝る気ないよね！？」

「落ち着け、ミニッツ子。」

「ミニッツ子言うなああああつ！！！！！」

やべえ……

この子オモシロ…！

真っ赤になってじたばたするし耳がピコピコ動いてるし…

ソロナをからかって楽しんでた博人だったが、ソロナが「もういい！」と言い自身の荷物が置いてあるところまで行ってしまった。残念。と思っていた博人だったがソロナが取り出した物を見てその

思考を停止させた。

「そつちがそうならこつちからも死にかける様なことをすればいいんだよ。」

ガチャン！！

「ソ、ソロナさん？…それは一体…？」

「これ？これはねえ、あたしが造ったソーサルキャノンって言うて魔石から魔力を取り出して撃ち出す武器だよ。ちなみに名前はオトギ。」

と説明しながら魔石が入ったマガジンをセット。サイトを展開、銃口解放、魔石装填と発射の準備を整えていった。そして発射準備が終わり、両手で持ち上げ、銃口を突き出すように構え、

「さあ〜て…せいぜい足掻け、塵芥が…」

ちよ、キャラが…

と博人がツツコミを入れる前に、

キユドオン！

ソロナのオトギが火を吹いた。

「いや！ちよつ！！おま！！！！」

博人は初弾を何とか回避。魔力弾が地面に着弾した途端、火炎が起こり辺りを焦がした。どうやら火の魔力石を使っているようだ。

「ははは〜！体二つとは言わず半分にしてやる！！」

上か下消し飛んでるし！！

「すまん！！ソロナ！！俺が悪かった！！！！」

「H A H A H A 〜〜！！」

聞いてねえし！！

その後オトギのマガジンが空になり、ようやくソロナの攻撃がやんだのは博人が30発目の魔力弾を回避した後である。その頃アリヤは切り株の上で小鳥と遊んでいたそうなの。

「どうもすみませんでした…」

「もういいよ。てか最初から素直に謝ればよかったんだよ。」

所々焦げた博人はソロナに頭を下げていた。
その頭をソロナはオトギで突いていた。

「終わったの？」

今まで小鳥と遊んでいたアリヤが近づき、二人に声をかけた。

「アリヤ…止めてくれてもよかったんじゃないか…？」

「でも、鳥さんが…」

そうかそうかあゝ鳥さんかあゝなら仕方ないな。

「そういえばソロナはこんなとこで何してたんだ？」

「あたし？あたしはこのオトギの部品と魔石を集めてたんだ。」

ソロナの造ったソーサルキャノンには構造に木やモンスターの骨や皮、魔石を使っており、いまだ試作品の段階であるオトギの部品を集めるため、この森に入ったらしい。

そこで準備をしていたところ、後ろから木が一斉に倒れてきたと言
う。

それを聞いた博人は、

「ホントスミマセン！！」

さらに頭を深く下げた。

「だからもういいって…あ、だったらさ！材料探すの手伝ってよ。それで許したげる。」

「ホントか？よし！手伝っちゃうよ！な、アリヤ？」

「うん。」

「で、何探すんだ？」

「えっとね、魔石をとりあえずなんでもいいから5個ぐらい、あとサンドリザードってやつがいたらそいつもよろしく。爪ほしいんだ。」

「OKわかった。」

「うん…わかった。」

「じゃあ一時間後にここでよろしく。」

「よし。じゃあ行くか！」

そういい、それぞれが別々の方向に分かれて素材採取へと向かった。しかし、ある程度遠くまで進んだ博人は、ある重要なことに気が付いた。

「あれ、俺どれが魔石かわかんねえじゃん！それにサンドリザード
ってなんだ？……まあ、それっぽいやつ集めればいいか。」

この世界へ来てまだ二日の博人は生物の名前などわかるはずもなく、
出だしていきなり止まってしまった。

だが博人は自身の判断で『っぽいやつ』を集めることにした。
そのまま博人は周りを見渡しながら森の奥へと進んでいった。

そして一時間後

「あいつらまだかな？」

集合場所にはソロナー一人が待っていた。

その手には自信が集めた魔石やモンスターの皮等があった。
それらの収穫品を足元へ置き、地面へ座り込んだソロナはゴロゴロ
と石を転がし、二人を待っていた。
そんなソロナの前に最初に現れたのは、

「ん〜、おっ、アリヤちゃん来たね〜」

「集まったよ…」

アリヤだった。

その手にはたくさんの魔石が集められていた。

「ほお〜どれどれ〜？おお！結構集めてくれたねえ！ありがとー」

「…うん。」

若干照れたように微笑んだアリヤはそのままソロナの隣へ腰かけた。

「博人はまだ？」

「あいつはまだ来てないよ。どこまで行ったんだ？」

「もう来ると思っ…」

「ほほう、それはどうして？」

「…勘？」

「勘ってそれは「おお〜い！」ってホントに来た……よ……」

アリヤの勘は当たり、博人はやってきた。
何か大きなものを引きずって。

「いや〜サンドリガードってこれかなって思って倒したんだけど、
でかすぎて持つてくるのに時間掛かっちゃった。」

「ちよっ！…これサンドリガードじゃなくてサンドドラゴンだよ！
？」

博人が見つけてきたもの、それはサンドリガードではなく、グリズ
リーの3倍はあるであろう大きさのサンドドラゴンだった。

「あんだ、これ一人で倒したの!？」

「そりゃ俺しかいないんだから一人に決まってるだろ。」

「いやいや!こいつはそう簡単に倒せるヤツじゃないよ!？」

「そうなのか?簡単に切れたけど…」

そついい、腰の刀に手を置いた。

「何それ？ 剣なの？」

「あゝ剣って言うか… 刀って言うんだけど。」

「カタナ？」

「そう。剣とは違って片方しか刃がついてないし反りがある。切ることに特化した剣だな。」

説明しつつ、大太刀を抜き取りソロナに見えるように掲げた。

「へええ！！ 見せて見せて！！！！」

その刀をとてもキラキラした目で要求するソロナ。初めて見る物に興味深々なようだ。

そんなソロナに気をつけるよ。と一言いい、刀を渡した。

「へえ〜。きれいだね〜それにほっそいねえこれ。それに刃に波打ってるし。」

「おいおい、大切に扱えよ。それしか無いんだから。」

「へ？ ああうん。でももう一本あるじゃん？」

「いや、これはだな…」

ソロナの問い博人は折れた刀を抜き取り、ソロナに見せた。

それを見たソロナは驚きの顔を見せたあと、「あらら、…こつなるのか。」と言い、持っていた刀を博人に返し、折れた刀を受け取った。

しばらく折れた刀身を眺めていたソロナはある提案をする。

「これ、あたしが直してあげようか？」

「へ？マジで！直せんのか！？」

「ん〜魔石とか使えば直ると思うよ。」

「でもいいのか？」

「いいよいいよ。初めて見る物を直してみたいしさ！」

「そうか！じゃあよろしく頼む。」

「はい任せました！それじゃあたしの家がある街まで来てよ。そこで直してみるからさ。」

「わかった。」

「じゃあちよっと待っててね〜」

そういい、サンドドラゴンの所へと駆けていった。どうやらサンドドラゴンからとれる素材は貴重らしく、とれるものはすべてとっていくようだ。

慣れた手つきで素材をとっていくソロナを見ていた博人は思わず魅入ってしまった。

「よし、完了。いや、大漁大漁。」

荷物が素材でいっぱいになったところでソロナは戻ってきた。見るからに重そうな荷物を博人は「持ってやるよ。」と言い、ソロナから引ったくり、自身の肩に担いだ。

ソロナは一瞬ポカンとしていたがすぐに元に戻り「あ、うん、ありがとね！」と照れながら礼を言った。

その後ろではアリヤが「むう……」とつまらなさそうに見ていた。

「よっし！じゃあ行くこうか！」

ソロナは元気よく声をだし、来た道を進んでいった。

博人たちはその後ろをついて行く。

ソロナの街へと向かうために。

途中、博人が集めた石をソロナとアリヤに見せるとすべてただの石ころだったそうなの。

第十話・耳っ子・（後書き）

ソロナの武器は某狩猟ゲームの重いボウガンのイメージになります。刀はすぐに直していいものかまだ考えている感じなので、どうなるか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1117t/>

異世界の双刀

2011年8月8日15時26分発行